

二つの世界を行き来する

山口裕之著
『映画を見る歴史の天使
あるいはベンヤミンのメディアと神学』
岩波書店、2020年6月

本書は、2001年から2015年までに発表された論文に加筆修正をほどこし、一著にまとめたものである。著者は前著『ベンヤミンのアレゴリー的思考』(人文書院、2003)において、アレゴリー的思考こそがベンヤミンの思想の基本的枠組みであることを示した。その研究成果に基づき、本書ではベンヤミンの文化論や芸術論とかれの神学的思考の密接な連関が明らかにされる(このうち前者は「メディアをめぐる思想」と総称され、現代のメディア論に接続される)。著者が問題視するように、ベンヤミン研究において、「この二つの主題圏にはある種の棲み分け」が生じており、一方を研究する者は他方に論究しないことが慣行となってしまうていた。本書はこうした通弊を厳しく批判し、メディアをめぐる思想と神学思想という二つの思想世界にアレゴリー的思考が通底していることを示すことで、ベンヤミンの思想の統合的な解釈を提示する。

研究史に通じていない評者は、残念ながらこうした解釈の革新性を正しく評価することができない。しかし、まさに神学的部分だけにしか興味をもっていなかった一読者として、『歴史の概念について』と『技術的複製可能性の時代の芸術作品』、そして『ドイツ悲劇の根源』が同一の思考モデルによっているという著者の主張には学ぶところがおおかった。というのも、著者自身も終章で指摘するように、ベンヤミンを含めこの時代のドイツのユダヤ人は、生活面でも教養面でもほぼ完全にドイツ化していた。このような人びとをユダヤ人にしていったのは、ユダヤ人としての生活や信仰の実体ではなく、ドイツ社会からの差別的待遇であった。かれらはいわば遑行的にユダヤ人としてのアイデンティティを構築する必要に迫られたのであり、その思想は一般にドイツ(ヨーロッパ)的なものとユダヤ的なものの緊張によって規定されることになる。このために、かれらの思想から神学的思考だけをとりだしユダヤ的なものとみなすなら、(軸足がヨーロッパ側にあるベンヤミンのような場合にはなおさら)その根本的な問題意識をとり逃すことにもなりかねないないのである(この意味からも、著者がベンヤミンの神学思想を同時代のキリスト教神学との関係から考察しているのは正当だといえる)。

くわえて、メディアについての丁寧な考察も意義深いものと感じられた。第2章と第3章において著者は、メディアの変遷とそれに伴う人間の知覚モードの変容について考察している。一般に、メディア論のなかでは印刷術の発明から映画、ラジオ、テレビ、デジタルメディアの発展が単線的にとらえられがちである。印刷術の普及によって視覚と文字メディアの肥大化が生じたが、映画などの現代的メディアの発達によって視覚への集中が緩和され、聴覚や触覚の重要性がますます、知覚における身体性が回復しつつある、というようにである。これに対し著者は、ベンヤミンと現在のメディア論の古典であるマクルーハンに共通してみられる視覚に対する触覚の復権という議論に着目し、その意義を17世紀以来のモリヌクス問題にさかのぼって明らかにする。そし



て、ベンヤミンの芸術論から読みだされた、技術的複製可能性の増大とそれに伴うオーラ〔アウラ〕の減衰、メディア技術の重層化とそれに伴う素朴な身体的経験の喪失、新たなメディアを通じた新たな身体性の成立といった分析軸をくわえることで、メディア史の図式の批判的更新を図っている。

モリヌクス問題についての比較的長い議論は、本書全体の構成のなかでは、ベンヤミンの芸術論がメディア論としてなおアクチュアルであることを示すために挿入されているように見える。しかし門外漢の評者にとっては、この議論自体、近代における知覚についての認識の発展とメディア技術の関係をたどるものとして興味深かった。17世紀以来人間の五感が切り離され、それぞれに役割や意義が割り当てられたこと。印刷物を媒介とした文字メディアはこのうち視覚にのみ働きかけるものであったが、新たなメディアはより複合的な感覚に働きかけること。メディアの変化に応じて、受容する人間の知覚のあり方も変わること。詳細な議論を通して、メディア論の基本的な問題構成がなおアクチュアルであることを納得させられた。

以上、評者にとって学びの大きかった2点——ベンヤミン思想全体にわたる統一的な解釈方法の提示とメディア論への寄与——をまず紹介したが、これは同時に本書の主要な主張にして成果であるように思われる。専門的研究者によるより踏み込んだ批評が俟たれる。

さて、三部構成をとる本書全体を見通すとき、上記の論点はおもに第I部（「技術」）と第II部（「身体」）で扱われる。アレゴリー的思考が図像メディアの分析だけでなく、言語論や神学的思考の基盤となっていること、そしてベンヤミンにおいてはアレゴリー的思考が元来神学的なものであることが示された後に、マクルーハンとの比較から現代のメディア論への接続が図られるという構成だ。以下では、そのほかの論点にふれつつ本書の内容を概観していきたい。

まず、著者のいうベンヤミンのアレゴリー的思考について簡単に確認しておきたい。アレゴリーとは、たとえば女神ユスティティアによって抽象的な正義概念を表現する場合のような図像表現形式である。図像それ自体と表示される内容のあいだに自然な統一感を欠いていることを特徴とし、作品世界のなかで「不自然な異物」となることもある（25ページ以下）。著者がベンヤミンのさまざまなテキストのなかにみるアレゴリー的思考とは、世界のなかに異物を見つけだし、そこに別の意味を読み出していくような思考のことである。

ベンヤミンの思想においては、ひっそりと佇むパサージュの片隅や写真に切り取られた瞬間の細部、テキストを構成する文字の形象性などさまざまなものが異物とみられ、別の意味が見出されていく。ベンヤミンがいたるところに異物を見出すのは、かれ自身がアレゴリーを見つける者（アレゴリカー）であるからだ。したがって本書でいわれるベンヤミンのアレゴリー的思考とは、かれが対象を分析する方法であるだけでなく、対象や問題を見いだす思考枠組みそのものでもあり、さらにいえばベンヤミンがみずからのテキストを構成する際の方法論でもある。このときアレゴリーの対象から読み出される別の意味とは、「根源的なもの」ないし「理念の世界」であるという。単純化をおそれずにいうなら、それこそが事物のもつ真の意味であり、アレゴリカーであるベンヤミンはそれを読み出し、テキストのなかに書きつけるのだ。

このように本書においてベンヤミンは、通常の世界（歴史、世俗、罪の世界）と理念の世界（ユートピア、楽園、天使の世界）という二つの世界を、独特な観察眼をもって往還する者として描かれる。また、そのアレゴリー的思考は「ユートピアからその離反〔墮罪〕を経てふたたび新たなユートピア的状态を目指すという三段階的な構図」（39ページ）として、初期言語論から最晩年の歴

史哲学的論考までいたるところに現れるとされる。

第2章および第3章で現代のメディア研究への貢献が論じられたのち、第4章ではアレゴリーの思想——繰り返すがそれは神学的なものでもある——が、ベンヤミンの唯物論をも特徴づけていることが、シュルレアリスム論のなかに登場する「人間学的唯物論」という概念を通して明らかにされる。その後、それまでの議論においてベンヤミン思想の根幹にあることが示されていた神学的思考の内実が問われていく。とりわけ、墮罪の思想を内包した二世界論に基づくアレゴリーの思考が、ベンヤミンの思想の全体を支配しているとき、神学的思考の鍵概念である「救済」が何を意味するのかという問いが探究される。

著者はここで、ベンヤミン思想のなかに二種の救済概念があることを指摘する。一方は、史的唯物論に依拠したこの世界のなかでの人間の生の改善を目指すような救済である。これに対し、もう一方の救済概念は、ある種の破局と通常の歴史的時間性からの超脱をとまなうものである。ここでは、救済が歴史的時間の内部で生起するのか、それともメシア的時間と呼ばれる歴史の外部で生起するのかという差異が問題となる。著者によれば、メシア的、非歴史的救済のイメージは、これまでの研究において正面から扱われてこなかった。これに対し著者は、「ベンヤミンのテキストのなかで紛れもなく姿を現している神学上の概念をありのままに受け止め」ようとする(345ページ)。本書では、このような救済イメージの二重性は、「歴史の世界を外から見るまなざし」の保持と「歴史の世界のなかに潜む超越性のかげらを拾い集め」という二つの営み(275ページ)の緊張をはらんだ同居として説明される。しかし、「ベンヤミンにおける神学という問題について、本書はまだその端緒についたばかり」(345ページ)であるともいわれ、今後さらなる検討がくわえられていくことが予告されている。

以上のような要約が正鵠を得たものであるかはなはだ心もとないが、本書の豊かな内容と意欲的な構想の一端は明らかになったのではないかと思う。本稿を閉じるにあたり、一点気になったことをあげるとすれば、本書におけるアクチュアリティの位置づけについてである。本書を通して著者は、アクチュアリティのある問題を論じることを重視している。そのこと自体はおそらく正しいのだが、評者にはアクチュアリティの範囲がいささか狭くとられすぎているのではないかとも思われた。著者は、今日の読者は「神学についてはいうまでもなく、史的唯物論をめぐる議論そのものにもはやアクチュアリティを求めることはおそくない」(242ページ)という。そして、おそらくはこの理由から、一方で政治的議論や革命についての議論に立ち入らず、他方で神学については、ベンヤミンを宗教的に描きすぎることのないよう論を抑制しているように見えた。

このような抑制が、本書のベンヤミン解釈がもつ本来の射程を狭めてしまっているということはないだろうか。たとえば、ベンヤミンの「救済」に、世界内的なものと破局的なものとの二つの区別がみられるというときに、それと革命との関係についてもう少し知りたいと感じた。というのもショーレムやブーバーがこの時期に紹介していたユダヤ教神秘主義には、世界内の救済と世界外の救済は密接に関連しているという思想がある。このような考え方をふまえるなら、本書ではさしあたって異なるものとして描かれた二種の救済は、相互に関連しているとみることもできるかもしれない。そしてその時には、芸術における大衆の覚醒(「世俗的な悟り *prophane Erleuchtung*」)についての議論——この議論は革命への大衆の動員にかかわる——が、神学的連関のなかでも重要な意味をもつようになるのではないか。

実際、著者はこの概念について注のなかで重要な指摘をしている。少し長いが引用してみたい。

「prophane Erleuchtung は、「世俗的啓示」と訳されることもあるが、神の摂理が認識可能な徴となって人間に与えられる「啓示 (Offenbarung)」に対して、Erleuchtung はあくまでも人間の側の認識の転換に関わる。宗教的な Erleuchtung が神の助けによってもたらされることがあるとしても (だからこそ「啓示」という訳語も Erleuchtung に対してときとして用いられることになるのだが)、世俗的な Erleuchtung には当然ながらそれはありえない。その意味で、「世俗的啓示」と訳すのは不適切と思われる」(319 ページ。179 ページ末尾の引用ではこの語が「世俗的啓示」と訳されているがこれは誤植であると思われる)。

通常、啓示 Offenbarung は、一神教、とりわけユダヤ教の文脈では、sich offenbaren、つまり、神がみずからを人間や歴史的世界に対して現したり提示したりすることを意味する。そのため、Erleuchtung (光に照らされて人間の側であらたな認識がひらけること。仏教における悟りにも、この訳語があてられる) と区別することは重要である。著者はベンヤミンが世俗的 profan という形容詞をこの語につけていることを根拠に、この大衆の覚醒に関わる議論を宗教的、神学的連関の外に位置づけているが、ここで認識を照らしている光が、本当に世界の内部から出ているのか、という点については一度問われてもよいように思う。

ここにあげた論点自体は的外れなものかもしれないが、いずれにせよアクチュアリティへの配慮のために、ユダヤ教神秘主義の秘教的部分とマルクス主義の政治的部分への論究が控えめになっているのだとすれば——評者にはそのようにもみえた——、すこし残念であるように思われた。とはいえ、現代メディア論との接続など本書の主要な美点がこのようなアクチュアリティの追究から生まれたのだとすれば、このような指摘はないものねだりといえるだろう。実際に、本書はベンヤミン研究の領域をこえて、さまざまな分野の読者の興味を惹く内容となっている。本書から、さまざまな方向に新たな研究がひろがってゆくだろう。本書がその射程の広さにふさわしい広範な読者をえて、真価を発揮してゆくことを願ってやまない。



(丸山空大)